

日本語の危機

津 森 明*

Crisis of Japanese language

Tsumori Akira

要約

今日、日本語は危機的な状態になっていると言われる。漢字、カタカナ、平仮名とさらにローマ字、アラビア数字というように複雑な日本語。最近には特にイニシアルで表記しているものも多く複雑である。国際化と言うのも必要だが祖国の文化を捨てるようなのは問題であろう。特に最近ではマスメディアにカタカナ語が多く街頭の広告などもカタカナ氾濫、新聞や雑誌の広告もカタカナばかりである。日本語の基本は「いろは」であるが四十七字を書ける人が少なくなって来た。学校教育の見直しが大切であろう。

キーワード：日本語

(Abstract)

We Japanese have 47 letters to express our thoughts. We borrowed them from Chinese characters and changed them into 48 kana letters. Recently remained letters are used in their advertisements to express their ideas.

The foundation of Japanese language are 'iroha'. But it is regret that fewer people are able to write 47 iroha 'correctly'.

It is important to look back the school education.

Key words: Japanese Language

急激な電脳（コンピューター）の発達によって世界一といわれた表意文字である日本語が危機とさえ言える状況になっているのではないだろうか。各種の調査を見ても最近の若者は書籍、新聞など余り読んでいない。その一つに外国語のカタカナ表示が多く使われ意味がわからないという声も聞かれる。

* 提出年月日2011年11月30日、高松短期大学秘書科

パソコンの普及からスマホといわれるものも登場、書籍を読まない者も増えており漢字は嫌われている。商店標示や広告を見ていると会社や商品などの標示なども八割ぐらいはカタカナか英語で書いている。県立歴史資料館もミュージアムなどの英語の標示になっている。また各地にあった公民館もコミュニティー・センターという呼称になっている。

往時には小学校に入ると漢字も多く教わっていたが今日では当用漢字以外は余り教えないのかすぐにカタカナ文字にする傾向がある。外国語をそのまま標示する際カタカナ表示にするのは昔から同じだが日本という国名があるのに外国語のジャパンという英語で言うのだろうか。「なでしこジャパン」で有名になったがなぜ英語で国名を言うのだろうか。かつてのオリンピックではニッポンと言っていた。

国名さえニホンかニッポンかはっきりしないというのもおかしいが正式にはニッポンと言うのが正確らしい。これは日本銀行や日本郵政など国家がからんだ組織の場合はいずれもニッポンと書くことになっている。ということは切手などニッポンと書いており、紙幣などにも日本をローマ字で書いているからだが国名については正式には決めていないのかニホン国憲法と書いておきりしてはいない。

大阪にあるのはニッポン橋といい東京の方はニホン橋というから難しい。大学はニホン大学と言っている。このように国名一つとってみても昔からニホンとニッポンの両説があり日本語は難しい。

日本語の基本である「いろは」も今日では「ゑ」と「ゐ」は知らない若者が多くなってきているが筆者の勤務する本学の生涯学習教育センターの講座で初めに「いろは」を書いてもらうことにしている。第二次大戦前の誕生の人でさえ全員が正解とはならないことが多い。まして団塊の世代以降はもっと正解率は低くなる。一字間違っても「いろは」は正解にならない。

「いろは」は四十七字であり、これは昭和二十二年までの国民学校（小学校）では最初に教えていたが今は中学校になっても余り教えていないようである。旧字を知らないと戦前の文章は読めないし意味も通じない。そう考えると日本語の危機はもう通り過ぎて日本語は早晚消える運命かもしれないという極論も出て来よう。国民学校や尋常小学校では「てうせん」とか「いうびん」とか今日の若者には通じない言葉も教えていた。注 朝鮮郵便

「いろは」は詩であり「色は匂へど散りぬるを 我が世誰ぞ常ならむ 有為の奥山けふ越えて浅き夢みし ゑひもせず」となっている。七五調で詠まれていて江戸時代から有名

な浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」は今日でも歌舞伎やテレビでも上演されているのである。

あの「仮名手本」というのは文字どおり人生の手本になる四十七人の忠臣について語ったということである。いろは四十七文字と忠臣の人数とを組み合わせているのである。漢字で書くとおおよそ意味はがわかる。これは非常に便利である。

日本語というのが世界無比といわれるのはリテラシー（読み書きの能力）が漢字、平仮名、カタカナ、ローマ字、アラビア数字というように複雑だからである。最近のマスメディアは外来語をカタカナで表すことが多く難しいのだろうが日本語は表記のさいも大体は表意文字なので意味がわかる。表意というのは発音だけでなく文字を見てわかるという至極便利である。

明治に開国した日本は短い期間に外国文化を導入している。当時の有識者たちは進んで西洋文化を導入するが日本の心は失ってはならないと啓蒙思想家であった西周らは（脱亜入欧）を訴え日本人の心を失わないようにすべきだと言い、これを「和魂洋才」といつている。今日は国際的になっているが日本の心というものを失ってはならないだろう。

最近の表記が無闇やたらに横文字を導入していることについては一層分かりにくくするし、それこそ大和魂（日本の心）を失ってしまうのではないか。

昨年夏に文化庁は国語に関する世論調査を実施して新聞に掲載された。八年前から実施している調査でその変遷も興味あるが日本語は乱れていると思わざるを得ない。

最近の人たちは形容詞の使い方もおかしい。テレビやラジオのアナウンサーまでが「すごいおいしい」と言っているのを聞いて驚いた。正しい日本語で言うなら「すごくおいしい」でなくてはならない。これは乱れているといえよう。

また著名な政治家が昭和天皇に対して「長い間ご苦勞様でした」と言っていたのを聞き敬語も乱れていると思った。世界でも珍しい敬語は基本的には長幼の序あるいは優しさ、孝行といったものが背景にあって出てくる言葉であろう。

日本語は昭和初期にもう乱れ始めたといわれ、いわゆる「ラ抜き言葉」というのが広がり今日では多くの人が使っている。これも問題で「食べられる」というのを「食べれる」という人が多くなってきている。口伝で広がっていくのだろうが日本語にとっては危機と言えよう。

本稿で言いたいのはカタカナ語の異常な普及であろう。それも日本人が勝手に作り出したとも言える用法で新聞に多く出ている。コンビニというのは日本語であろう。コンビニエンスストアというのが英語であるが日本で略すると日本でしか通じずに余分に言葉を

覚えざるを得ないことになる。いつかテレビで在米の日本人にインタビューでメタボと言
い通じなかったのを思い出す。パソコンというのもパーソナル・コンピューターである。

日本で外国語をカタカナ表記するさいには余程、注意しないと変な言葉になってしまう
心配がある。最近は何新聞などにカタカナが多すぎる。最近の新聞から二、三の例をあげよ
う。特に外国語にするとそれは新語になってきて意味不明ということも多くなるろう。

ランキング スマートフォン ハイブリッドカー アイドルグループなどが氾濫してい
る。これらのカタカナ語が多すぎて最近の新聞などを見ていると一ページに何十というカ
タカナが氾濫している。

カタカナというのは欧米諸国の言葉が入った際に明治の人たちが和字でいわゆる当て
字を造ったさい、余り多くになるとわからないということからカタカナにしたのである。
ビールの麦酒という当て字は今日でも使われている。まあよく出来た和製文字であろう
か。これらを和製文字とも言われている。しかし英語と日本語は文法が違っていて難し
い。アメリカでライターとかメタボなんていっても通じない。和製英語というものでこ
うした導入によった「日本語」はなお難しくなっているのだろう。当て字と言われるもの
には歌留多が有名だし煙草あるいは天婦羅などが古くから知られていた。これらを和製外国
語といっている。

日本人は新語を作るのが好きであるようだ。外来語が導入され最近は何国際会議などにつ
いて報道される際、英字の発音をそのままカタカナにする場合とアルファベットで書く場
合もあり昭和の敗戦後にはDDTとかも普及し、このイニシアルで表現するのがだんだん
ひどくなっている。シンポジウム、パネルディスカッション、フリーター、ライターなどな
ど日本語になってしまっているようである。

日本人はこうした外来語を略して使うから例えばコンビニエンス ストアーをコンビニ
として使っている。日本以外に通じないだろう。外来語の普及は仕方ないとしても正しい
日本語を知ることが今日非常に大切である。

最近は何電脳が発達でものを言わずに意思が通じるようになって便利社会になったがその
一方で礼節がおろそかになり敬語も次第に軽視されているようである。また挨拶も出来な
い者が増えている。特に若い者にこの傾向が強い。これは自己中心が増えてきた証拠であ
らう。

年賀状などもすべて印刷というのではやや失敬に当たるだろう。自分の名くらいは自分
の直筆で書くべきであろう。基本は挨拶であろう。言葉は何年長に対する敬語をいかに使う

かである。

文部科学省という中央官庁が出来たがこれもよく考えるとおかしい。日本語で使われている漢字は文字どおり中国から来ているがそれを発音するとき例えば和音の「行く」は、漢音では「こう」と読み、呉音では「ぎょう」であり宋音は「あん」だという。

熟語を作る際に文部という呉音と科学という漢音を組み合わせるのは混乱させる元であろう。もっと日本語の文章を正確に使うべきではないか。

敬語については便利社会が原因だと思うが小中学校での基本的な礼節の指導を一層強化すべきであろう。日本語の危機は「いろは四十七字」を理解していない者が多い、つまり今日使われていない（ゐ、ゑ）の文字を知らない。これでは孔子が言ったという温故知新「古きを訪ねて新しきを知る」が分からないことになる。

旧字が分からないと古典や少なくとも地域でもそうだが歴史がわからないことになる。こんちに使わない文字でも知っておかないと日本語が理解されないことになる。

研 究 紀 要

第56・57合併号

平成24年 2月25日 印刷

平成24年 2月28日 発行

編集発行 高 松 大 学
高 松 短 期 大 学
〒761-0194 高松市春日町960番地
TEL (087) 841-3255
FAX (087) 841-3064

印 刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町1-8-10
TEL (087) 833-5811